

# 第50回広島県錦鯉品評会

平成25年11月3日に呉市にある呉ポートピアパークで第50回広島県錦鯉品評会が開催されます。今年は30の養殖業者から11品種16部門計700尾の出品が予定されています。

この品評会は昭和38年から50年間続いている行事で、都道府県が後援する錦鯉品評会の中では新潟県錦鯉品評会（今年で第53回）に次ぐ伝統ある行事です。

前号で紹介しましたように、最近広島からの海外へのニシキゴイの輸出が増えていることもあり、海外からも多くのバイヤーが訪れます。

しかしこの50年間、全ての品評会が平穏無事に開催できたわけではなく、大きな転機となった時期がありました。今からちょうど10年前、平成15年のコイヘルペスウイルス（KHV）病の国内での発生です。

この年の10月に茨城県の霞ヶ浦で養殖されていた食用ゴイでKHV病の感染が確認され、その後瞬く間に全国へ蔓延しました。

それまでの錦鯉品評会は、各養殖業者が出品したニシキゴイを部門ごとに水槽へ集めて展示していました。この方法は、同じ水槽の中でニシキゴイの体型や発色、模様を直接比較できるため優劣がわかりやすく、審査が迅速に行えるというメリットがある反面、どこかの養殖場から何らかの病原体が持ち込まれた場合、同じ水槽に入れられたニシキゴイ全てに感染してしまうという大きなリスクを抱えていました。

10年前に国内でKHV病が発生したことで、錦鯉品評会における防疫体制をどう確保するのかが活発に議論されるようになり、大型魚はマイプル方式として、水槽には同一業者のニシキゴイしか収容しないこととし、若年魚については袋詰方式で審査する手法が確立しました。これは、同じ部門の出品魚があちこちの水槽に散在するため、審査に時間を要する、また若年魚の袋詰めは、袋の内側が曇って中のニシキゴイが見え難いなど、デメリットはありますが、疾病の感染リスクを大幅に減らすことができるという大きなメリットがあります。

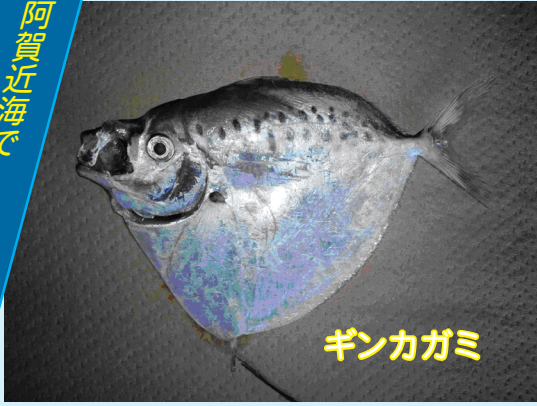
なお、マイプル方式を取っているとはいえ、一般の来場者が水槽に手を入れてしまったり、ニシキゴイが暴れて飛沫が飛んでしまったりと、防疫は完璧ではありません。したがって養殖業者は毎年2回のKHV病等の検査を受けて、養殖場内のニシキゴイが疾病に感染していないことを確認し、品評会終了後も、出品魚を持ち帰った養殖業者の方々は、出品したニシキゴイを隔離して一定期間様子を観て、異

常な行動や病状が現れないことを確認した上で通常の飼育に戻すなど、大変な苦勞をされ、出品するニシキゴイだけでなく、売買されるニシキゴイの安全性確保に努められています。

ニシキゴイ品評会は、関係する多くの方々の協力と見えない努力によって支えられてきました。

是非第50回広島県錦鯉品評会へ足を運んでいただき、水槽を優雅に泳ぐ錦鯉の向こう側に、ニシキゴイ疾病対策や流通の安全性確保、更に海外への輸出展開に携わってきた関係者の努力を併せて見ていただければと思います。

阿賀近海で  
こんな  
獲れました



ギンカガミ

ギンカガミは、スズキ目スズキ亜目ギンカガミ科ギンカガミ属に属する一科一属一種の魚で、日本では九州以南の暖かい海に生息しており、瀬戸内海ではなかなかお目にかかることができない珍しい魚です。  
薄っぺらで、三枚に卸するのが難しい魚ですが、刺身にするととても美味しいようです。

## 職員の異動 (4月1日付)

本年度は、1名が転出され、1名が赴任しました。

### 転出

副主任研究員 若野真 農林水産局水産課

### 転入

副主任研究員 西井祥則 農林水産局水産課から